

どんぐりと山猫 宮沢賢治

おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。

かねた一郎さま 九月十九日

あなたは、ごきげんよろしいほど、けっこです。

あした、めんどなさいばんしますから、おいで

んなさい。とびどぐもたないでくなさい。

山ねこ 拝

こんなのです。字はまるでへたで、墨もがきがさして指につくくらいでした。けれども一郎はうれしくてうれしくてたまりませんでした。はがきをそつと学校のかばんにしまって、うちじゅうとんだりはねたりしました。

ね床にもぐってからも、山猫のにやあとした顔や、そのめんどろだという裁判のけしきなどを考えて、おそくまでねむりませんでした。

けれども、一郎が眼をさましたときは、もうすっかり明るくなっていました。おもてにでてみると、まわりの山は、みんなたったいまできたばかりのようにうるうるもりあがって、まっ青なそらのしたにならんでいました。一郎はいそいでごはんをたべて、ひとり谷川に沿ったこみちを、かみの方へのぼって行きました。

すきとおった風がざあっと吹くと、栗の木はばらばらと実をおとしました。一郎は栗の木をみあげて、

「栗の木、栗の木、やまねこがここを通らなかつたかい。」とききました。栗の木はちよつとしずかになつて、

「やまねこなら、けさはやく、馬車でひがしの方へ飛んで行きましたよ。」と答えました。

「東ならぼくのいく方だねえ、おかしいな、とにかくもつと試してみよう。栗の木ありがとう。」

栗の木はだまつてまた実をばらばらとおとしました。

一郎がすこし行きますと、そこはもう笛ふきの滝でした。笛ふきの滝というのは、まっ白な岩の崖のなかほどに、小さな穴があいていて、そこから水が笛のように鳴って飛び出し、すぐ滝になって、ごうごう谷におちているのさうでした。

一郎は滝に向いて叫びました。

「おいおい、笛ふき、やまねこがここを通らなかつたかい。」

滝がぴーぴー答えました。

「やまねこは、さっき、馬車で西の方へ飛んで行きましたよ。」

「おかしいな、西ならぼくのうちの方だ。けれども、まあも少し行ってみよ

う。ふえふき、ありがとう。」

滝はまたもとのように笛を吹きつづけました。

一郎がまたすこし行きますと、一本のぶなの木のしたに、たくさんの白いきのこが、どつてどつてどつてどつてこと、変な楽隊をやっていました。

一郎はからだをかがめて、

「おい、きのこ、やまねこが、ここを通らなかつたかい。」

とききました。するときのこは

「やまねこなら、けさはやく、馬車で南の方へ飛んで行きましたよ。」とこたえました。一郎は首をひねりました。

「みなみならあつちの山のなかだ。おかしいな。まあもすこし行ってみよう。

きのこ、ありがとう。」

きのこはみんないそがしそうに、どつてどつてこと、あのへんな楽隊をつづけました。

一郎はまたすこし行きました。すると一本のくるみの木の梢を、栗鼠がびよんとんでいました。一郎はすぐ手まねぎしてそれをとめて、

「おい、りす、やまねこがここを通らなかつたかい。」とたずねました。するとりすは、木の上から、額に手をかざして、一郎を見ながらこたえました。

「やまねこなら、けさまだくらいうちに馬車でみなみの方へ飛んで行きましたよ。」

「みなみへ行ったなんて、二とこでそんなことを言うのはおかしいなあ。けれどもまあもすこし行ってみよう。りす、ありがとう。」りすはもう居ませんでした。ただくるみのいちばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉がちらつとひかっただけでした。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなって消えてしまいました。そして谷川の南の、まっ黒な榎かやの木の森の方へ、あたらしいちいさなみちがついていました。一郎はそのみちをのぼって行きました。榎の枝はまっくろに重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまっかにして、汗をほとほとおとしながら、その

坂をのぼりますと、にわかにはつと明るくなって、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まわりは立派なオリヅいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

その草地のまん中に、せいのおかしな形の男が、膝を曲げて手に革鞭かわむちをもつて、だまつてこつちをみていたのです。

一郎はだんだんそばへ行つて、びっくりして立ちどまつてしまいました。

その男は、片眼で、見えない方の眼は、白くびくびくうごき、上着のような半纏はんまわのようなへんなものを着て、だいいち足が、ひどくまがつて山羊やぎのよう、ことにそのあしききときたら、ごはんをもるへらのかたちだったので。一郎は気味が悪かつたのですが、なるべく落ちついてたずねました。

「あなたは山猫をしりませんか。」

するとその男は、横眼で一郎の顔を見て、口をまげてにやつとわらつて言いました。

「山ねこさまはいますぐに、ここに戻つてお出やるよ。おまえは一郎さんだな。」

一郎はぎよつとして、一あしうしろにさがつて、

「え、ぼく一郎です。けれども、どうしてそれを知つてますか。」と言いました。するとその奇体な男はいよいよにやにやしてしまいました。

「そんたら、はがき見だべ。」

「見ました。それで来たんです。」

「あのぶんしょうは、ずいぶん下手だべ。」と男は下をむいてかなしそうに言いました。一郎はきのどくになって、

「さあ、なかなか、ぶんしょうがうまいようでしたよ。」

と言いますと、男はよろこんで、息をはあはあして、耳のあたりまでまっ赤になり、きものえりをひろげて、風をからだに入れながら、

「あの字もなかなかうまいか。」とききました。一郎は、おもわず笑いだしながら、へんじしました。

「うまいですね。五年生だつてあのくらいには書けないでしょう。」

すると男は、急にまたいやな顔をしました。

「五年生っていうのは、尋常五年生だべ。」その声が、あんまり力なくあわれに聞えましたので、一郎はあわてて言いました。

「いいえ、大学の五年生ですよ。」

すると、男はまたよろこんで、まるで、顔じゅう口のようにして、にたにたにた笑って叫びました。

「あのはがきはわしが書いたのだよ。」

一郎はおかしいのをこらえて、

「ぜんたいあなたはなにですか。」とたずねますと、男は急にまじめになつて、

「わしは山ねこさまの馬車別当だよ。」と言いました。

そのとき、風がどうと吹いてきて、草はいちめん波だち、別当は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎はおかしいとおもつて、ふりかえつて見ますと、そこに山猫が、黄いろな陣羽織のようなものを着て、緑いろの眼をまん円にして立っていました。

やっぱり山猫の耳は、立って尖っているなど、一郎がおもいましたら、山ねこはびよこつとおじぎをしました。一郎もていねいに挨拶しました。

「いや、こんにちは、きのうははがきをありがとう。」

山猫はひげをぴんとひっぱつて、腹をつき出して言いました。

「こんにちは、よくいらつしやいました。じつはおどといから、めんどうなあらそいがおこつて、ちよつと裁判にこまりましたので、あなたのお考えを、うかがいたいとおもいましたのです。まあ、ゆつくり、おやすみください。じき、どんぐりどもがまいりましょう。どうもまい年、この裁判でくるしみま

す。「山ねこは、ふどころから、巻煙草の箱を出して、じぶんが一本くわえ、

「いかがですか。」と一郎に出しました。一郎はびつくりして、

「いいえ。」と言いましたら、山ねこはおおよろにわらつて、

「ふふん、まだお若いから、」と言いながら、マッチをしゅつと擦つて、わぎと顔をしかめて、青いけむりをふうと吐きました。山ねこの馬車別当は、気を

付けの姿勢で、しゃんと立っていました。いかにも、たばこのほしいのをむりにこらえているらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

そのとき、一郎は、足もとでパチパチ塩のはぜるような、音をききました。

びつくりして屈かんで見ますと、草のなかに、あっちにもこっちにも、黄金いろの円いものが、びかびかひかかっているのです。よくみると、みんなそれは赤いずぼんをはいたどんぐりで、もうその数ときたら、三百でも利かないようでした。わあわあわあわあ、みんななにか云いっているのです。

「あ、来たな。蟻あのようにやってくる。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日はそが日当りがいいから、そここの草を刈れ。」やまねこは巻たばこを投げすてて、大きいそぎで馬車別当にいつけました。馬車別当もたいへんあわてて、腰から大きな鎌をとりだして、ぎくぎくと、やまねこの前のこの草を刈りました。そこへ四方の草のなかから、どんぐりどもが、ぎらぎらひかつて、飛び出して、わあわあわあわあ言いました。

馬車別当が、こんどは鈴をがらんがらんがらんと振りました。音はかやの森に、がらんがらんがらんとひびき、黄金のどんぐりどもは、すこしすかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い長い繻子しゅうすの服を着て、勿体もったらしく、どんぐりどもの前にすわっていました。まるで奈良のだいぶつさまにさんけいするみんなの絵のようだとい一郎はおもいました。別当がこんどは、革鞭を二三べん、ひゅうぱちっ、ひゅう、ぱちつと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりはびかびかしてじつにきれいでした。

「裁判ももう今日で三日目だぞ、いい加減になかなおりをしたらどうだ。」山ねこが、すこし心配そうに、それでもむりに威張つて言いますと、どんぐりどもは口々に叫びました。

「いいええ、だめです、なんといつたつて頭のとがつてるのがいちばんえらいんです。そしてわたしがいちばんとがつています。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。いちばんまるいのはわたしです。」

「大きなことだよ。大きなのがいちばんえらいんだよ。わたしがいちばん大

きいからわたしがえらいんだよ。」

「そうでないよ。わたしのほうがよほど大きいと、きのうも判事さんがおつしやっただじやないか。」

「だめだ、そんなこと。せいの高いのだよ。せいの高いことなんだよ。」

「押しっこのえらいひとだよ。押しっこをしてきめるんだよ。」もうみんな、がやがやがやがや言つて、なにがなんだか、まるで蜂の巣をつつついたように、わけがわからなくなりました。そこでやまねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかしろ。しずまれ、しずまれ。」

別当がむちをひゅうばちつとならしましたのでどんぐりどもは、やっとしずまりました。やまねこは、びんとひげをひねつて言いました。

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減に仲なおりしたらどうだ。」

すると、もうどんぐりどもが、くちぐちに云いました。

「いえいえ、だめです。なんといいつたつて、頭のとがっているのがいちばんえらいのです。」

「いいえ、ちがいます。まるいのがえらいのです。」

「そうでないよ。大きなことだよ。」がやがやがや、もうなにがなんだかわからなくなりました。山猫が叫びました。

「だまれ、やかましい。ここをなんとか得る。しずまれしずまれ。」

別当が、むちをひゅうばちつと鳴らしました。山猫がひげをぴんとひねつて言いました。

「裁判ももうきょうで三日目だぞ。いい加減にかなおりをしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。あたまのとがったものが……。」「がやがやがやがや。」

山ねこが叫びました。

「やかましい。ここをなんとかしろ。しずまれ、しずまれ。」

別当が、むちをひゅうばちつと鳴らし、どんぐりはみんなしずまりました。

山猫が一郎にそつと申しました。

「このとおりです。どうしたらいいでしょう。」

一郎はわらつてこたえました。

「そんなら、こう言いわたしたらいいでしょう。このなかでいちばんばかで、めちやくちやで、まるでなつていないようなのが、いちばんえらいとね。ぼくお説教できたいんです。」

山猫はなるほどというふうにならずいて、それからいかにも気取つて、繻子のきもの胸むねを開いて、黄いろの陣羽織をちよつと出してどんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちやくちやで、てんでなつていなくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ。」

どんぐりは、しいんとしてしまいました。それはそれはしいんとして、堅まつてしまいました。

そこで山猫は、黒い繻子の服をぬいで、額の汗をぬぐいながら、一郎の手をとりました。別当も大よろこびで、五六べん、鞭をひゅうばちつ、ひゅうばちつ、ひゅうひゅうばちつと鳴らしました。やまねこが言いました。

「どうもありがとうございます。これほどのひどい裁判を、まるで一分半でかたづけてくださいました。どうかこれからわたしの裁判所の、名譽判事になってください。これからも、葉書が行ったら、どうか来てくださいますか。そのたびにお礼はいたします。」

「承知しました。お礼なんかありませんよ。」

「いいえ、お礼はどうかとってください。わたしのじんかくにかかりますから。そしてこれからは、葉書にかねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございますか。」

一郎が「ええ、かまいません。」と申しますと、やまねこはまだなにか言いたそうに、しばらくひげをひねつて、眼をぱちぱちさせていましたが、とうとう決心したらしく言い出しました。

「それから、はがきの文句ですが、これからは、用事これありに付き、明日出頭すべしと書いてどうでしょう。」

一郎はわらつて言いました。

「さあ、なんだか変ですね。そいっだけはやめた方がいいでしょう。」

山猫は、どうも言いようがまづかった、いかにも残念だというふうにしほらくひげをひねったまま、下を向いていましたが、やっとあきらめて言いましました。

「それでは、文句はいままでのとおりにしましょう。そこで今日のお礼ですが、あなたは黄金のどんぐり一升と、塩鮭のあたまと、どっちをおすきですか。」

「黄金のどんぐりがすきです。」

山猫は、鮭の頭でなくて、まあよかったというように、口早に馬車別当に云いました。

「どんぐりを一升早くもってこい。一升にたりなかったら、めっきのどんぐりもませてこい。はやく。」

別当は、さっきのどんぐりをますに入れて、はかって叫びました。

「ちようど一升あります。」

山ねこの陣羽織が風にばたばた鳴りました。そこで山ねこは、大きく延びあがって、めをつぶって、半分あくびをしながら言いました。

「よし、はやく馬車のしたくをしろ。」白い大きなきのごでこしらえた馬車が、ひっぱりだされました。そしてなんだかねずみいろの、おかしな形の馬がついていきます。

「さあ、おうちへお送りいたしますよう。」山猫が言いました。二人は馬車のり別当は、どんぐりのますを馬車のなかに入れました。

ひゆう、ぱちっ。

馬車は草地をはなれました。木や藪がけむりのようにぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、やまねこはとぼけたかおつきで、遠くをみていました。

馬車が進むにしがって、どんぐりはだんだん光がうすくなって、まもなく馬車がとまったときは、あたりまえの茶いろのどんぐりに変わっていました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えな

くなって、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持って立っていました。

それからあと、山ねこ押というはがきは、もうきませんでした。やっぱり、出頭すべしと書いてもいいと言えはよかったと、一郎はどきどき思うのです。

◆出典『注文の多い料理店』（新潮社、一九九〇年）

水仙月の四日 宮沢賢治

雪婆ゆきばんごは、遠くへ出かけておりました。

猫のような耳を持ち、ぼやぼやした灰色の髪をした雪婆ゆきばんごは、西の山脈の、縮れたぎらぎらの雲をこえて、遠くへ出かけていたのです。

一人の子供が、赤い毛布ケットにくるまって、しきりにカリメラのことを考えながら、大きな象の頭の形をした、雪丘ゆきおかのすそを、せかせかうちのほうへ急いでおりました。

（そら、新聞紙しんぶんがみをとがった形に巻いて、ふうふうと吹くと、炭からまるで青火が燃える。ぼくはカリメラなべに赤砂糖をひとつまみ入れて、それからザラメをひとつまみ入れる。水を足して、あとほくつくつくつと煮るんだ。）ほんとうにもう一生懸命いっしょうけんめい、子供はカリメラのことを考えながらうちのほうへ急いでいました。

「お日様は、空のずうつと遠くのすき通った冷たいところで、まばゆい白い火を、どしどしおたきなさいます。」

その光はまっすぐに四方に発射し、下のほうに落ちてきては、ひっそりした台地の雪を、一面まばゆい雪花石膏せつかせつこうの板にしました。

二匹の雪狼ゆきおのが、べろべろ真つ赤な舌をはきながら、象の頭の形をした、雪丘の上のほうを歩いていました。こいつらは人の目には見えないのですが、いっぺん風にあおられると、台地の外れの雪の上から、すぐぼやぼやの雪雲

を踏んで、空を駆け回りもするのです。

「しゅ、あんまり行っていけないったら。」雪狼の後ろから白熊の毛皮の三角帽子をあみだにかぶり、顔をりんごのように輝かしながら、雪童子ゆきわらすがゆつくり歩いて来ました。

雪狼どもは頭を振ってくるりと回り、また真つ赤な舌をはいて走りました。

「カンオピイア、

もう水仙が咲きだすぞ

おまえのガラスの水車みずぐるま

きつきと回せ。」

雪童子は真つ青な空を見上げて見えない星に叫びました。その空からは青光が波になってわくわくと降り、雪狼どもは、ずうつと遠くで炎のように赤い舌をべろべろはいています。

「しゅ、戻ったら、しゅ。」雪童子が跳ね上がるようにしてしかりましたら、今まで雪にくつきり落ちていた雪童子の影法師は、ぎらつと白い光に変わり、狼どもは耳を立てていっさんに戻って来ました。

「アンドロメダ、

あぜみの花がもう咲くぞ、

おまえのランプのアルコール、

しゅうしゅとふかせ。」

雪童子は、風のように象の形の丘に登りました。雪には風で貝殻のような型がつき、その頂には、一本の大きなくりの木が、美しい黄金色の宿り木のまわりをつけて立っていました。

「とつといで。」雪童子が丘に登りながら言いますと、一匹の雪狼は、主人の小さな歯のちらつと光るのを見るや、ゴムまりのようにいきなり木に跳ね上がって、その赤い実のついた小さな枝を、がちがちかりました。木の上でしきりに首を曲げている雪狼の影法師は、大きく長く丘の雪に落ち、枝はどうとう青い皮と、黄色の心とをちぎられて、今登って来たばかりの雪童子の足下に落ちました。

「ありがとう。」雪童子はそれを拾いながら、白とあい色の野原に立っている、美しい町をはるかに眺めました。川がきらきら光って、停車場からは、白い煙も上がっていました。雪童子は目を丘のふもとに落としました。その山すその細い雪道を、さっきの赤毛布を着た子供が、いっしんに山のうちのほうへ急いでいるのです。

「あいつは昨日、炭のそりを押して行った。砂糖を買って、自分だけ帰って来たな。」雪童子は笑いながら、手に持っていた宿り木の枝を、ぷいっと子供に投げつけました。枝はまるで弾のようにまっすぐに飛んで行って、確かに子供の目の前に落ちました。

子供はびっくりして枝を拾って、きよろきよろあちこちを見回しています。雪童子は笑って革むちを一つひゅうと鳴らしました。

すると、雲もなく磨き上げられたような群青の空から、真っ白な雪が、さぎの毛のように、一面に落ちてきました。それは下の平原の雪や、ビール色の日光、茶色のひのきででき上がった、静かなきれいな日曜日を、いっそう美しくしたのです。

子供は、宿り木の枝を持って、一生懸命に歩きだしました。

けれども、そのりっぱな雪が落ちきってしまったところから、お日様はなんだか空の遠くのほうへお移りになって、そこのお旅屋で、あのまばゆい白い

火を、新しくおたきななされているようでした。

そして西北の方からは、少し風が吹いてきました。

もうよほど、空も冷たくなってきたのです。東の遠くの海のほうでは、空のしかけを外したような、小さなカタツという音が聞こえ、いつか真っ白な鏡に変わってしまったお日様の面を、何か小さなものがどんどん横切っていくようです。

雪童子は革むちをわきの下にはさみ、堅く腕を組み、唇を結んで、その風の吹いてくるほうをじっと見ていました。狼どもも、まっすぐに首を伸ばして、しきりにそっちを望みました。

風はだんだん強くなり、足下の雪は、さらさらさらさら後ろへ流れ、まもなく向こうの山脈の頂に、ぱっと白い煙のようなものが立ったと思うと、もう西の方は、すっかり灰色に暗くなりました。

雪童子の目は、鋭く燃えるように光りました。空はすっかり白くなり、風はまるで引きさくよう、早くも乾いた細かな雪がやって来ました。そこらはまるで灰色の雪でいっぱいです。雪だか雲だかもわからないのです。

丘の稜は、もうあっちもこっちも、みんな一度に、きしるように切るように鳴りだしました。地平線も町も、みんな暗い煙の向こうになってしまい、雪童子の白い影ばかり、ぼんやりまっすぐに立っています。

そのさくようなほえるような風の音の中から、

「ひゅう、何をぐずぐずしているの。さあ降らすんだよ。降らすんだよ。ひゅうひゅうひゅう、ひゅうひゅう、降らすんだよ、飛ばすんだよ、何をぐずぐずしているの。こんなに忙しいのにさ。ひゅう、ひゅう、向こうからさえわざと三人連れて来たじゃないか。さあ、降らすんだよ。ひゅう。」怪しい声が聞こえてきました。

雪童子はまるで電気にかかったように飛び立ちました。雪婆んごがやって来たのです。

ぱちっ、雪童子の革むちが鳴りました。狼どもはいっぺんに跳ね上がりました。雪童子は顔色も青ざめ、唇も結ばれ、帽子も飛んでしまいました。

「ひゅう、ひゅう、さあしつかりやるんだよ。怠けちゃいけないよ。ひゅう、ひゅう。さあしつかりやっておくれ。今日はこころは水仙月の四日だよ。さあしつかりさ。ひゅう。」

雪婆んごの、ぼやぼや冷たい白髪は、雪と風の中で渦になりました。どんどん駆ける黒雲の間から、そのとがった耳と、ぎらぎら光る黄金の目も見えます。

西の方の野原から連れて来られた三人の雪童子も、みんな顔色に血の気もなく、きちつと唇をかんで、お互いあいさつさえも交わさずに、もう続けざませわしく革むちを鳴らし行ったり来たりしました。もうどこが丘だか雪煙だか空だかさえもわからなかったのです。聞こえるものは雪婆んごのあちこち行ったり来たりして叫ぶ声、お互いの革むちの音、それから今は雪の中を駆け歩く九匹の雪狼どもの息の音ばかり、その中から雪童子はふと、風に消されて泣いているさつきの子供の声を聞きました。

雪童子のひとみはちよっとおかしく燃えました。しばらく立ち止まって考えていましたがいきなり激しくむちを振ってそっちへ走ったのです。

けれどもそれは方角が違っていたらしく雪童子はずうっと南の方の黒い松山にぶつかりました。雪童子は革むちをわきにはさんで耳を澄しました。

「ひゅう、ひゅう、怠けちゃ承知しないよ。降らすんだよ、降らすんだよ。さあ、ひゅう。今日は水仙月の四日だよ。ひゅう、ひゅう、ひゅう、ひゅうひゅう。」

そんな激しい風や雪の声の間からすき通るような泣き声がちらつとまた聞こえてきました。雪童子はまっすぐにそっちへ駆けて行きました。雪婆んごのふり乱した髪が、その顔に気味悪くさわりました。峠の雪の中に、赤い毛布をかぶったさつきの子が、風に囲まれて、もう足を雪から抜けなくなつてよろよろ倒れ、雪に手をつけて起き上がろうとして泣いていたのです。

「毛布をかぶって、うつむけになっておいで。毛布をかぶって、うつむけになっておいで。ひゅう。」雪童子は走りながら叫びました。けれどもそれは子供にはただ風の声と聞こえ、その形は目に見えなかったのです。

「うつむけに倒れておいで。ひゅう。動いちゃいけない。じぎやむから毛布をかぶって倒れておいで。」雪童子は駆け戻りながらまた叫びました。子供はやっぱり起き上がろうとしてもがいていました。

「倒れておいで。ひゅう、黙ってうつむけに倒れておいで、今日はそんなに寒くないんだから凍えやしない。」

雪童子は、も一度走り抜けながら叫びました。子供は口をびくびく曲げて泣きながらまた起き上がろうとしました。

「倒れているんだよ。だめだねえ。」雪童子は向こうからわざとひどく突き当たって子供を倒しました。

「ひゅう、もつとしつかりやっておくれ、怠けちゃいけない。さあ、ひゅう。」雪婆んごがやって来ました。そのさけたように紫な口も、とがった歯もぼんやり見えました。

「おや、おかしな子がいるね、そうそう、こっちへとおしまい。水仙月の四日だもの、一人や二人とたつていいんだよ。」

「ええ、そうです。さあ、死んでしまえ。」雪童子はわざとひどくぶつかりながらまたそつと言いました。

「倒れているんだよ。動いちゃいけない。動いちゃいけないたら。」

狼どもが駆け巡り、黒い足は雪雲の間からちらちらしました。

「そうそう、それでいいよ。さあ、降らしておくれ。怠けちゃ承知しないよ。」

ひゅうひゅうひゅう、ひゅうひゅう。」雪婆んごは、また向こうへ飛んで行きました。

子供はまた起き上がろうとしました。雪童子は笑いながら、も一度ひどく突き当たりました。もうそのころは、ぼんやり暗くなって、まだ三時にもならないに、日が暮れるように思われたのです。子供は力もつきて、もう起き上がろうとしませんでした。雪童子は笑いながら、手を伸ばして、その赤い毛布を上からすつかりかけてやりました。

「そうして眠っておいで。ふとんをたくさんかけてあげるから。そうすれば凍えないんだよ。あしたの朝までカリメラの夢を見ておいで。」

雪童子は同じどこを何べんも駆けて、雪をたくさん子供の上にかぶせました。まもなく赤い毛布も見えなくなり、辺りとの高さも同じになってしまいました。

「あの子供は、ぼくのやった宿り木を持っていた。」雪童子はつぶやいて、ちよつと泣くようにしました。

「さあ、しっかりと、今日は夜の二時まで休みなすだよ。ここらは水仙月の四日なんだから、休んじやいけな。さあ、降らしておくれ。ひゅう、ひゅうひゅう、ひゅひゅ。」

雪婆んごはまた遠くの風の中で叫びました。

そして、風と雪と、ぼさぼさの灰のような雲の中で、ほんとうに日は暮れ雪は夜じゅう降って降って降ったのです。やつと夜明けに近いころ、雪婆んごはも一度、南から北へまっすぐにはせながら言いました。

「さあ、もうそろそろ休んでいいよ。あたしはこれからまた海のほうへ行くからね、だれもついて来ないでいいよ。ゆっくり休んでこの次の支度をしておいておくれ。ああまあいいあんばいだった。水仙月の四日がうまくすんで。」

その目はやみの中でおかしく青く光り、ぼさぼさの髪を渦巻かせ口をびくびくしながら、東の方へ駆けて行きました。

野原も丘もほつとしたようになって、雪は青白く光りました。空もいつかすつかり晴れて、ききょう色の天球には、一面の星座がまたたきました。

雪童子らは、めいめい自分の狼を連れて、初めてお互いあいさつをしました。

「ずいぶんひどかったね。」

「ああ。」

「今度はいつ会うだろう。」

「いつだろうねえ、しかし今年中に、もう二へんぐらいのもんだろう。」

「早くいっしょに北へ帰りたいね。」

「ああ。」

「ぎつき子供が一人死んだな。」

「大丈夫だよ。眠っているんだ。あしたあそこへぼく印をつけておくから。」

「ああ、もう帰ろう。夜明けまでに向こうへ行かなくちゃ。」

「まあいいだろう。ぼくね、どうしてもわからない。あいつはカシオペアの三つ星だろう。みんな青い火なんだろう。それなのに、どうして火がよく燃えれば、雪をよくすんだらう。」

「それはね、電気菓子と同じだよ。そら、ぐるぐるぐる回っているだろう。ザラメがみんな、ふわふわのお菓子になるねえ、だから火がよく燃えればいいんだよ。」

「ああ。」

「じゃ、さよなら。」

「さよなら。」

三人の雪童子は、九匹の雪狼を連れて、西の方へ帰って行きました。

まもなく東の空が黄ばらるように光り、こはく色に輝き、黄金に燃えだしました。丘も野原も新しい雪でいっぱいです。

雪狼どもはつかれてぐったり座っています。雪童子も雪に座って笑いしました。そのほおりんごのよう、その息はゆりのように香りました。

ぎらぎらのお日様がお昇りになりました。今朝は青みがかったいっそうりっぱです。日光は桃色にいっぱいに流れました。雪狼は起き上がって大きく口をあき、その口からは青い炎がゆらゆらと燃えました。

「さあ、おまえたちはぼくについておいで。夜が明けたから、あの子供を起こさなきゃあいけない。」

雪童子は走って、あの昨日の子供のうずまわっているところへ行きました。

「さあ、ここらの雪を散らしておくれ。」

雪狼どもは、たちまち後足で、そこらの雪をけたてました。風がそれを煙のように飛ばしました。

かんじきをはき毛皮を着た人が、村のほうから急いでやって来ました。

「もういいよ。」雪童子は子供の赤い毛布のはじが、ちらつと雪から出たのを見て叫びました。

「お父さんが来たよ。もう目をお覚まし。」雪童子は後ろの丘に駆け上がって一本の雪煙を立てながら叫びました。子供はちらっと動いたようでした。そして毛皮の人は一生懸命走って来ました。

◆ 出典『注文の多い料理店』（新潮社、一九九〇年）